

主日の福音 2025/11/2(No.1381)

死者の日 (ヨハネ 6:37-40)

お墓に眠っている人が必要なものを届ける



11月、死者の月になりました。今月死者のためにミサをささげる方が多いと思いますので、主任司祭も助任司祭も今月はミサ依頼が多いといいなあ、と期待していると思います。また今日は、午後から墓地でのミサを予定していますので、死者のために私たちが出来ること、亡くなった方が期待していることを、福音朗読から読み取りたいと思います。

「わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。」

(6・39) このイエス様の使命、目的の中に、私たちに出来ること、死者が期待していることを読み取りたいと思います。

まず私たちが出来ることですが、私たちは身体を持っているので、身体を使った働きができます。それぞれに先祖がいて、先に亡くなった家族がいます。彼らは私たちの所に歩いてくるわけにはいきませんが、私たちは彼らの眠る墓に、車で行くか歩いて行くか、とにかく訪ねて行くことができます。出かけて行って、墓の掃除をしてあげたり、もちろん個人のために祈ることができます。それは、「わたしに与えてくださった人を一人も失わない」と言われるイエス様の言葉にも合致します。

誰も世話してくれない墓、誰も近づかない墓は、そのままにしておくとうどうなるでしょう。聖書の言葉を借りれば、「あなたたちは不幸だ。人目につかない墓のようなものである。その上を歩く人は気づかない。」(ルカ 11・44) 誰にも気付かれない墓となれば、イエス様の「一人も失わない」という使命が果たされなくなってしまう危険があります。私たちはそうならないためにも、定期的に墓を訪ね、お世話をするわけです。

亡くなった方が期待していることもあるでしょう。彼らの家族が定期的に墓を訪ねてくれるとします。この世の関係者が彼らと繋がっていることを積極的に示してもらおう。それを亡くなった方々も期待するでしょう。単に墓の掃除とか手入れとかをしてくれるだけでなく、「終わりの日に復活すること」を手助けしてくれることを期待しているのではないのでしょうか。

墓の前で祈ることもそうですし、子どもたち孫たちに、こんな人が私たちの先祖にいて、霊名と名前を教えてあげて、ミサをささげるお手本も見せて、それが子供や孫たちにも受け継がれていくようにする。こうして確実に、「わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させる」また先祖たちの期待に応えることができます。私たちは自分一人の力で天国に行けないし、イエス様が一人残らず復活させることにも、私たちの働きは繋がっているのです。

今日の話をまとめます。死者のために祈ること、墓に集い、すべての人の復活を願うこと。これは生きている私たちにとって、イエス様の使命、おいでになった目的、御父の御心に参加することなのです。

ラテラノ教会の献堂(ヨハネ 2:13-22)